

江戸の坂道散策

鐙坂 (文京区)



山野 勝 Yamano Masaru 坂道研究家

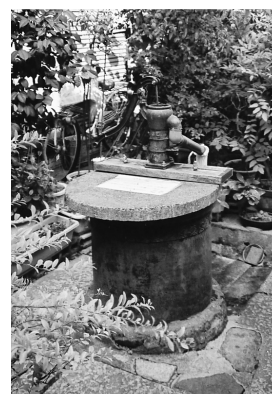
1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。著書に『江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞出版）、『江戸と東京の坂』（日本芸文社）がある。

文 京区の本郷四丁目20と31の間を、南の春日通りに向かって上る坂がある。江戸時代からある名坂「鐙坂」である。東側に門構えの瀟洒な邸宅があり、大きな樹木が坂に緑の影を投じている。西側には古い石垣が高い壁のように続き、この坂の歴史が古いことを暗示しているようだ。

坂名の由来は、坂下の逆L字形の道筋が鐙の形に似ているからとか、江戸時代に近くに鐙を作る職人の子孫が住んでいたとかに因る。鐙とは馬の鞍にさげて、乗者が足を入れる馬具のこと。鐙の製作者については、霊亀2年(716)、1750人の高麗人が武蔵国に移住し、武蔵鐙五六の鐙ともいう)を作っていたというから、この坂の付近にその一族が移り住んでいたのかもしれない。

坂を上っていくと、左手に、金田一京助・春彦の旧居跡の説明板がある。京助はアイヌの叙事詩ユーカラを世に問い、京助は言語学者として知られる。

坂上を右折して石段を下っていくと、清和公園に出る。この辺りは江戸時代、上野高崎藩(群馬)松平右



樋口一葉も使った「堀り抜き井戸」。

京亮(8・2万石)の中屋敷だったところ。明治維新後原っぱになっていて、右京山とか右京が原とかと呼ばれていた。近くに住んでいた樋口一葉は、この右京山に妹と虫の音を聞きにきたり、また、母親と九段で打ち上げられた花火を眺めたりしたという。今も静かな佇まいだ。

鐙坂は松平家の東脇を走っていたことになるから、武士たちにとって生活道路だったことになる。古趣を帯びたこの坂は今も生き続けている。

コラ公堀 一服茶屋

鐙坂下の近くにある菊水湯を右折し、下町風の通りの2本目を右折すると、樋口一葉の旧居跡がある。民家の間の石畳の先に、一葉も使ったと思われる「堀り抜き井戸」が残っている。明治23年(1890)、一葉は母と妹と3人でこの地の借家に移ってきたのだ。一葉の借家は、初めは井戸を背にした正面にあったが、次いで井戸の並びの、下道の面したところに移転したといふ。

鐙坂アクセス ▶ 都営三田線・大江戸線の春日駅A2を出て左折し、春日通りを本郷三丁目方向に進む。1つ目の信号を左折して進むと、鐙坂の坂上に出る。